

B-92 衣料用人工皮革の縫製条件設定のための基礎的研究 (第7報) アイロ
ンの温度が人工皮革に及ぼす影響 大妻女大短大 の山下スミ
東学大 石毛フミ子 鳴海多恵子 辻宗子 文教大 松田歌子

目的 被服のアイロンがりは 縫製上、着用上絶対に不可欠な事である。特にスエード
タイプの人工皮革の縫製は 縫いづれ防止の上からも、アイロンによる接着縫製が利用され
ている。そこで今回は アイロンの温度によつて人工皮革にどのような影響を及ぼすか実
験を行つた。

方法 試料は前報のもののうち6種を用いた。アイロンはドライ・スチームおよび小型
プレス機を使用した。先づ予備実験により アイロンの温度・スチームの有無・時間等を
5段階にきめた。実験項目と方法は次の通りである。(1)厚さ シクネスゲージにより各々
の温度でプレス後の試料を測定。(2)防しむ度 防しむ度試験機で各試料のプレス直後及び
1週間放置後の開角度を測定して防しむ度を算出し 折り目のセント住からアイロンの温
度と検討。(3)硬軟度 カンテレバ法により試料の硬軟度を測定。(4)反射率 アイロン
の温度及びプレスの方法によつて 毛並みの光沢に及ぼす影響を拡散反射率により測定。
「こて光り」についても検討。

結果 (1) 厚さは概して温度の上昇に伴つて減る傾向で 約10%減少 (2) 防
しむ度は温度が高くなるにつれて低下し、スチームの方がドライの場合よりも30~50%減
少 (3) 硬軟度 人工皮革の種類により それぞれのタイプで類似した変化の傾向を示す
が よこ方向の A_1 A_2 と除き温度上昇につれて増加の傾向である。(4) 光沢の変化は
 A_1 において最も顕著であつた。